

鈴木信一著『即興ダンスセラピーの哲学 身体運動・他者・カップリング』

大橋 さつき

本書は、山海塾舞踏手の岩下徹が実施する実践に参加した著者の体験をもとに、その動作モデルや他者との連動のモデルを検証し、技法や効果を明らかにする試みの成果である。岩下によるダンスセラピーの実践としては、1980年代後半に滋賀県の精神病院における試み（「岩下-湖南メソッド」）が始まっており、既に日本独自のダンスセラピーの一つとして認識されてきた。本書の対象となる実践は、岩下によって、2003年より月1回の頻度で地域施設において実施されてきた即興ダンスのワークショップであり、参加者は、情緒障がい、知的障がいなどのある40歳前後の成人（その大半が継続的な参加者）、身体に障がいを持つ者、また、舞踏やダンスの経験者、音楽療法の専門家、楽器の演奏者、ボランティア等である。著者は、このワークショップに2008年から参加しており、謝辞のページには、岩下への感謝の想いと共に、初めてワークショップに参加した時の感動が、研究の「出発点」とであると記されている（p. 191）。それから、「自身の眼差しおよび肉体内部で感じ取った事実を記述し」（p. 6）、その「産出／生成」の記述から現象を捉えることに挑み続けてきた。

本書の特長は、岩下の即興ダンスの取り組みを対象に、外部の視点からの科学的な考察に留まることなく、哲学的分析に基づく仮説設定と著者自身の内省的記述を基に展開している点である。

まず第1章では、ハイデガー哲学の論究に基づき、即興ダンスの持つ実存的意義と身体運動の分析、モデル化に求められる課題を明らかにする。ハイデガーの前期著作『存在と時間』における諸概念からプロセスに有効な説明図式を構築している。例えば、即興ダンスにおいて、被投的に選択された動きがなぜ現存在としての他者の動きと連動しているのかという問いを立て、その様相の移行を明らかにする必要性を打ち出している。この要件についての検討は、さらに、後期著作の『哲学への寄与』から採用された概念も加えた言及に発展する。そこでは原初的な思索の下に、他者との実存的連動については、存在に開かれて可能になると説明し直された。この点は、本書の中盤以降の考察を支える軸となっているだろう。つまり、身体運動における連動は、両者の存在の間に響き合い共振する関係にあるが、それが恣意的ではなく自ずと生じると説明し、「恣意性を持たないことにより踊る者は開ける」（p. 48）とまとめて

いる。このような検討を複数重ね、ハイデガーの論から即興ダンスにおける動作産出および連動の構造のモデル化に展開可能な内容を抽出している。

第2章では、メルロ＝ポンティの前期著作『知覚の現象学』で提示される身体運動論に照らし合わせ、動作産出のメカニズムを検討する。例えば、「地と図の構造」、「身体図式」の概念に基づく「連動」の現出の仕方の検討では、身体運動を部分-全体関係ではなく包摂関係で捉え、包み合うひとまとまりのものとして捉える論に着目して、「身体空間」の具体的な内実に取り、「時間性・空間性」との関係を探りながら、運動が生じる以前の過程を丁寧に検討している。加えて、後期著作『見えるものと見えないもの』から「絡み合い-交叉配列」にもあたり、「眼差しの運動」、「接触運動における『肉』の概念」について検討し、他者との「絡み合い」の内実を考察している。運動主体の固有性の確保に重点を置いて理解されており、コロナ禍で身体性が失われていく現状では、この部分だけでも十分に読み応えがあると感じた。

第3章では、マトゥラーナとヴァレラが提唱した「オートポイエーシス論」を持ち込み、生命現象における産出のプロセス、連動のプロセスを解明するこの論を、身体運動の動作算出システムの基本的枠組としての適用できないか検討する。即興ダンスにおける身体運動は、まさに生命現象である。オートポイエーシス論においては、生命体は、自律的な存在であり閉鎖系システムであるとされる。生命体は自ら観察し自ら即した世界を構成しつつ生きているため、他の生命体はその世界を直接認知することはできないと考えられる。確かに、この自律的な閉鎖系システムを前提とすることで、身体運動の産出や連動の主観的、暗黙的な部分にまで着目することが可能となる。シンプルにまとめられている章ではあるが、著者がこの領域横断的な着想に至った道程に意味があり、辿り着いた瞬間の感動を想像するだけで嬉しい。

いよいよ第4章では、第1章、第2章、第3章から引き継いだ内容を基に動作単位産出システムの構成を試みる。オートポイエーシス・システムをその枠組として使用し、ハイデガーの存在論、メルロ＝ポンティの身体運動論から引き継がれた内容と著者が体験してきた即興ダンスの実践から抽出した内容を基に動作を産出する構成素を設定し、メカニズムモデルを構成している。すなわち、

即興ダンスにおいて、「恒常的に連動する構成素」と「選択的に連動する構成素」に分け、前者に、「注意」、「運動感覚・内部感覚の感じ取り」、「予期」、「身体・運動イメージの形成」、「配置」、「肌理・隔たり・方向の調整」、「反復・リズム化」の7つを挙げ、後者に、「呼吸の調整」、「皮膚感触の感じ取り」、「表象イメージの形成」、「眼差しによる感じ取り」、「情態性／気分」の5つを挙げ、仮説を設定した。そして、これらを状況に合わせて選択・連動し動作単位を産出し、“前に”産出した動作単位を手掛かりに“次の”動作単位を産出することを繰り返すというメカニズムモデルを明らかにした。加えて、他者と踊る際、自己の産出した動作単位は他者の動作単位を産出する手掛かりとして他者の産出過程に入り込み、そこで他者が産出した動作単位は自己の次の動作単位産出の過程の手掛かりとして入り込むという相互的な連動の持続性に着目し、他者とのカップリング・システムについても言及している。

第5章では、動作単位産出システム、カップリング・システムを用い、5名の参加者と著者が数年に渡って取り組んだ即興ダンスの実践について、その事実を丁寧に記述し、考察を行っている。

続いて、第6章では、実践における記述内容を基に、連動システムを起ち上げ持続するために必要な気づきや手法について検討し提示している。特に、第2節において、カップリング・システムにおける構成素として、「隣接」、「誘導・応答」、「イメージ・役割設定」、「共振」のタイプに分類を行っている。これらの4つのタイプの構成素が互いに重層的に連動する点を見出しており、興味深い。さらに、作為的に他者に連動していることを自ら演出している状態として「疑似カップリング」が起りうることを指摘している。「意識的に意図する以前に予期・感じ取り・調整を行い、動作単位を産出するのが即興ダンスであり、それによって他者の動作単位産出に即応できている」が、疑似カップリングの場合は、「意識的に他者の動作単位の輪郭をなぞるように動作産出を行い、他者はそれに応じるとしても両者の動きのタイミングが合わず、即応できない」と説明する (p. 173)。疑似カップリングは、表に出てくる動きの輪郭だけを外側から観察する方法では見誤ってしまう恐れがある。ダンスや身体運動を通して療育、セラピーと呼ばれる対人支援の実践を行う者にとって、この状態にあるか否かを見極める力は必須である。

第7章では、動作の産出、他者との連動システム起ち上げと持続によって踊る者にどのような効果が生じるのか、経年変化が生じるのかについて考察している。その結果として、「他者との連動可能性／動作単位の選択可能性の拡大における自己治癒」、「恒常性・安定性による自己治癒」、「自

己肯定による自然治癒」、「自己表現の向上としての自己治癒」、「社会参画能力向上による自己治癒」という自己治癒の形を提示した。自ら立案した動作単位産出システム、カップリング・システムのメカニズムに結びつけて、即興ダンスの遂行と踊る者の自己治癒のつながりを導き出すことにより、その治療的効果の言及に至ったのである。存在論的に、開かれた状態として他者と共に居る世界に存在する自己の内的実感に迫ることで、即興ダンスの治癒過程の解明に貢献したと言えるだろう。

最終章である第8章では、前章までのまとめと研究の課題について論じて終わる。

さて、土方巽に始まる暗黒舞踏が日本で生まれたものであるために、舞踏の活用が「日本固有」のダンスセラピーの根源として考えられる傾向が強く、その理論の体系化が待ち望まれてきた。本書のタイトルにある「即興ダンスセラピー」について、著者は冒頭で「1970年前後に日本で生まれた舞踏を基にした即興で行うダンスセラピー」を「即興ダンスセラピーと記す」(p. 2)と示している。よって、日本固有の「舞踏系ダンスセラピー」の効果に関する本格的な研究としての評価も期待できるだろう。しかし一方で、世界に広がった舞踏の固有性や境界についての検討も必要となっている。そのような意味においては、評者は、本書を「舞踏系のダンスセラピー」を体系化した研究成果というよりも、唯一無二の岩下による実践を対象に、現象学的な人間科学の研究に一石を投じたという点でより重視したい。ダンスセラピーのように外側からの説明だけでは十分に言語化できず、その場の内だけにとどまりがちな経験知について、当事者としてどのように体験しているかを内側から考察しようとする姿勢、胆力の要る蓄積から構造や本質といったある種の真理を取り出し伝えようとする執念によって生まれた渾身の作と言えるだろう。対人関係を軸とする実践は、生身の人間を相手とし、生身の人間が研究者として介入する以上、必然的に人間同士のかかわり合いが生まれ、そのことが研究実践そのものの内実に影響を与える要因にもなっている。そうであるにもかかわらず、これまで研究者が自らの主観を取り上げることに對して、非常に警戒的であった。本書は、代替可能な観察者にはできない、関与者としての著者の当事者性・身体性を強く打ち出しつつも、哲学的視点に基づくシステム構築の過程を共有することで読み手の理解性を高めている。医療や療育の現場における即興ダンスセラピーの効果的な導入・実践に資するだけでなく、人間的・主観的な部分を排除してきた近代的な知のあり方を乗り越えるものとしても捉えることができるだろう。本書に勇気づけられた読者の一人として心から感謝したい。(晃洋書房、2021年2月刊行)